

## グローバルな視点を持つ原三溪

川幡 留司

### 原家初代善三郎

原善三郎は、文政一〇（一八二七）年埼玉県児玉郡渡瀬に、原太兵衛の長男として生まれました。製糸の技術に長け、自家製の生糸を前橋、桐生など付近の絹業地に売り歩き、「善三郎の生糸は質が良く、信頼出来る」と好評を得ました。

安政六（一八五九）年、横浜の港が開かれると、日本の生糸は大変な勢いで輸出されていきました。善三郎は早速横浜に来て、「この町の将来は有望なり」と見通しを立て、三年後の文久二（一八六二）年、本町三丁目「亀屋」なる外国商社への生糸売込店を構えました。当時、同業の店は九〇店余りありましたが、善三郎は持ち前の商才を発揮し、大成しました。明治五（一八七二）年、東京横浜間

に鉄道が敷かれ、明治天皇が横浜に行幸され、祝辞を賜われました際に、横浜商人を代表して挨拶したのが善三郎でした。即ち善三郎は、横浜出店わずか十年で、横浜を代表する商人になっていたのです。

その後も日本の生糸は、フランスを中心としたヨーロッパ一帯に輸出され続けました。当時ヨーロッパでは、蚕の病気「微粒子病」が蔓延し、蚕が育たず生糸が出来なかつたからでした。このため、財を成した善三郎は、本牧三之谷の海沿いに広い土地を求め、東京湾を俯瞰する断崖上に松風閣を建て、別荘としました。同時に、その周辺の造園にかかりましたが、完成したのは、二代目富太郎の時でした。善三郎には男子がなく、後継ぎに婿を迎えねばなりませんでした。当時、東京の跡見女学校に通っていた孫娘の

安子（後年、「屋寿」）のために、善三郎は跡見花蔭校長にも婿むこの紹介を頼んでいたでしょう。跡見花蔭校長の紹介と骨折りにより、明治二四（一八九一）年、青木富太郎が安子の婿として、原家に入籍、善三郎の跡を継ぐことになりました。

### 原家二代富太郎

富太郎は、明治元（一八六八）年、岐阜県岐阜市柳津町下佐波の代々庄屋を務めた青木家の久衛、琴夫妻の長男として生まれました。

幼くして賢い子として知られた富太郎は、父親が家事だけでなく、村長として村人のためにも働く姿を見て育ちました。そして明治七（一八七四）年頃に開校した地元の小学校に入学しました。この小学校には傑出した教師が三名いました。濃尾平野を流れる木曾、長良、揖斐三大河の氾濫防止事業に生涯尽し、神様と敬慕された山田省三郎、次いで大阪毎日新聞の詩壇を担当、関西詩壇の指導者として

活躍した小川僧泰、さらに師範学校出で首席教師を務めた安藤環です。成績優秀な富太郎は卒業を待つことなく、すぐにでも上級の漢文学の師の元に付くべきと安藤環が父に勧めたであろうと、また、この三師は富太郎のその後の人生に大きく影響した人物であったであろうと青木正一氏は『郷土研究岐阜』に記しています<sup>①</sup>。

安藤環の勧めを受けてか、富太郎は小学校を退き、日置江の漢学者であった東山青木俊之助の「三餘私塾」、ついで、大垣の元彦根藩藩校の侍講職を勤めた野村藤蔭の「雞鳴塾」に入り、漢文と歴史を学びました。いずれの師も大変な人格者であり、富太郎のその後の人格形成に与えた影響は大きかったと伝えられています。

明治一八（一八八五）年四月、富太郎は、青雲の志を抱いて上京し、西洋の文物に詳しい大隈重信創設の東京専門学校（早稲田大学前身）に入学、政治、法律等を学びました。また、学費等の足しにと、跡見女学校の教壇にも立ち



図1 原三溪肖像  
三溪園所蔵

ました。

明治二四

(一八九一)

年、原家の

となった富太

郎は、善三郎

の優れた商法について敬意をもって学び、また新しい時代への備えについても熟考していました。

明治三二(一八九九)年、善三郎が亡くなり、跡継ぎとなった富太郎は、江戸時代以来の古い企業形態を新しい時代に合わせるため、原商店の組織をこれまでの個人企業から合名会社組織に改めるなどの改革を行い、さらなる事業の拡大を図っていききました。

## 輸出業

横浜港が開かれ、生糸の輸出量は年々増加していききましたが、当初、その輸出のほとんどは、港近くに立ち並ぶ外

国商館によるものでした。明治二〇年代後半頃から、三井をはじめとする日本の商社も、ようやく輸出できるようになりしました。原合名会社も時期到来と見定め、明治三二(一八九九)年、ロシア、フランス、ドイツ、イタリア、アメリカ等の主要都市に市況調査員を派遣しました。

この頃、輸出の多くはヨーロッパ向けでしたが、原合名会社は、明治三四(一九〇一)年に開通したシベリア鉄道を利用して、他国に先駆け、ロシアから輸出を始めました。

次いでヨーロッパ、最後はアメリカ向けが主となりました。日本の生糸は相変らず好評で、一九一〇年代には、アメリカにおける輸入生糸の七割が日本からで、日本の輸出生糸の九割以上がアメリカ向けでした。当初から、横浜港が生糸の輸出の大半を占めていましたが、その後、横浜港だけで全ての輸出生糸を扱う年が続きました。この横浜港からの輸出生糸のうち、一五%あまりは原合名会社によるものでした。広い世界を相手にした輸出業について、富太郎は「外国貿易は、思った程儲かる仕事ではなかった。

しかし男らしい商売で誠に愉快だった」と満足の意を含む言葉を残しています。

## 製糸業

既に先代の善三郎が、富岡製糸場にならって故郷の渡瀬に、二〇〇釜の洋式製糸所を建て経営していましたが、明治三五（一九〇二）年、富太郎は、元官宮の富岡製糸場と名古屋製糸場、宇都宮の大疇<sup>しま</sup>製糸場を三井から譲り受け、一大製糸家となりました。富岡製糸場の蚕種研究課では、早くにメンデルの法則に着目し、外山勝太郎が蚕にもこの法則が沿うことを世界で初めて実証しました。早速原合名会社では、良質の種を作り、契約養蚕家に配布し、高品質の生糸生産にあたりました。富岡製糸場は、当時世界最高品質の生糸、絹を産出したフランスの建築技術、材料等を使い、明治五（一八七二）年に建てられた世界有数の優れた大製糸場であり、現在は世界遺産に登録され、日本の国宝にも指定されています。

## 三溪園の創設

生糸で財を成した富太郎は、三溪園の造園にかかり、明治三九（一九〇六）年、無料で開園しました。さらに昼間は、園内の初音茶屋等で麦茶を無料でふるまいました。

大正四（一九一五）年には、芥川龍之介が、三溪園で香煎を頂き、「ひとはかり浮く香煎や白湯の秋」なる俳句を作っています。

外苑の開園後、関西、鎌倉等から由緒ある建造物を集め、園内の適所に配置し、よりいっそう庭景を整え、大正二二（一九三三）年には内苑も竣工し、全園の完成となりました。完成の前に来園した大隈重信早稲田大学総長について、市島春城（早稲田大学初代図書館長）は、『春城筆話』において「紳士神裔<sup>こつちう</sup>が骨董<sup>もてあそ</sup>を弄ぶなら望むらくは、斯<sup>か</sup>くの如き歴史価値のある大骨董に注目するようになって欲しいと語られ、例の困難な足を忘れたかのように園内を隈なく歩き回られた」と記しています。

全園完成の頃までには、次の方々が三溪園を訪れました。

政財界 伊藤博文、大隈重信、高橋是清、鈍翁益田孝、

根津嘉一郎、岩原謙庵、野崎廣太

文学者 夏目漱石、坪内逍遙、島崎藤村、佐佐木信綱

美術・建築 岡倉天心、矢代幸雄、伊東忠太、関野貞

哲学者 和辻哲郎、谷川徹三、阿部次郎、安倍能成

画家 横山大観、下村観山、小林古径、安田靉彦

前田青邨、新井寛方、速水御舟、岸田劉生

彫刻家 米原雲海、佐藤玄々、平櫛田中、内藤伸

外国人 ウィリアム・タクト(米)、ウォーナー(米)、

タゴール(印)、ヴィルド・ラック(仏)

## 茶会

富太郎(以後、「三溪」)は早くから「三溪」と号して、

画も描き、漢詩も作りました。造園工事が進む中、三溪は

三井物産初代社長の鈍翁益田孝の勧めで、「数寄者」の仲

間入りをしました。数寄者とは、茶道を本業とせず、また、

形式にこだわらずに侘茶を楽しむ茶人のことで、多くは財

界人でした。千利休に始まる侘茶は、安土桃山時代に大名

をはじめとする多くの武士が習うことで大いに栄えました

が、江戸時代の終りと共に、半世紀余り暗黒時代に入り、

消滅するのではないかと危ぶまれました。各流派の家元達

の懸命の努力で、茶道が現在のような家元組織にして復活

するまでの間、数寄者は茶を楽しみながら、我が国伝統芸

能茶道が存続するよう大役を果たしていたのです。

その他数寄者は、豊かな財力で美術品を収集、美術品の

海外流出の防止役もしていました。三溪自身も数寄者とし

て、茶道の維持に努めていましたが、さらに茶道を習う人

が男性から女性に替わった事で、茶道を習う人の数が増え、

茶道が滅ばず、新たに発展したのです。この事においても、

三溪は大きく貢献していたのです。

## 関東大震災後の横浜市復興と横浜貿易復興会の活動

大正一二(一九二三)年八月三十一日、三溪は、親友の野

村洋三と共に箱根に行きました。初日は野村夫人の実家、

若之湯温泉の紀伊国屋に泊まり、翌日、先に鈍翁から贈られていた強羅別荘に移り寛いでいたところ、大地震に見舞われました。横浜の家や会社へは全く連絡がつかず、是は大変な事と即、身支度を整え、帰宅の途についたものの、丸三日がかりの歩き旅となりました。そして帰宅後、その疲れを癒す暇もなく、三溪は大仕事にとりかかりました。大被害を受けた横浜市の復興と港湾設備等の修復のため、横浜市と有力財界人等により横浜市復興会と横浜貿易復興会が発足し、三溪は両会の会長となり、復活のため尽力し、成果を上げました。その時の苦労は、並大抵ではなかったと私は多くの方々からお聞きしましたが、中でも、鎌倉円覚寺の朝比奈宗源氏がいろいろ語られた後に発せられた「横浜の人は、三溪先生のご恩を決して忘れてはいけません」、古美術商中村富次郎氏の「三溪先生のあの時のご苦勞を思い出すと今でも涙が出て来ます」という当時の三溪をよく知るお二方の言葉を折々に思い出しますと、目頭が熱くなる思いがします。

## 註

(1) 青木正一「在郷時代の原富太郎」〔郷土研究岐阜〕第49号、一九八八年



図2 三溪園 三溪園所蔵